

平成13年度学長特別研究

## 木の文化の可能性と展望

(代表) 空間造形学科	教授	川口 宗敏
空間造形学科	助教授	宮川 潤次
生産造形学科	助教授	黒田 宏治

### 1. 研究の目的

わが国の産業・文化には、木や人の手で作り出したものも多い。しかし、近年の機械化と効率化の推進のもとで、その掘りどころとしてきた技術や文化が失われつつあり、今後のわが国の産業・文化のあり方や有数の木材産地である本県の産業振興を図る上で、再度、木の文化を見直し、その可能性を探ることが求められている。そこで、「木の文化」研究会を設立し、木を利用した空間及び製品等の情報収集や事例研究を通して、産業経済・芸術文化・生活環境など多様な分野における木の可能性を研究するとともに、シンポジウム等の公開イベントを開催し、木の重要性を広く社会にアピールすることを目的とした。

### 2. 実施内容

#### 2.1 「木の文化」研究会の設立と情報収集

本学の教官3名が中心となり、「木の文化」研究会を設立した。約2ヶ月に1回の割合で研究会を開催し、木の文化に関する最近の情報交換及び収集を行った。特に、国内における木を生かした地域活性化についての情報収集と意見交換が中心テーマとなった。これらの成果は、本学の紀要第4号にまとめる予定である。

#### 2.2 「木の文化」に関わる地域事例調査

平成13年12月21日～23日及び平成14年3月28日～30日の2回、九州北部地域（大分県、熊本県、佐賀県、福岡県）における木造建築及び木の文化事業に関する事例調査を、行政に対するヒアリング調査を主体として実施した。

##### 1. 日田市（大分県日田市）

###### ①日田市役所ヒアリング

- ・林業振興と木のプロダクトについて。

###### ②日田高校体育館

- ・大規模木造建築の調査。

###### ③日田の歴史的町並み

- ・日田は江戸時代に天領として栄え、現在、木造3階建ての日本丸薬店や江戸時代から続く草野本家など貴重な木造建物が残っており、歴史的な木造建築群の町並み調査を実施。

##### 2. 小国町（熊本県小国町）

###### ①小国町役場ヒアリング

- ・町の総合計画「悠木の里」づくりについて。
- ・地場産業と観光施策について。
- ・木造公共建築について。

#### ②小国ドーム（町立体育館）

- ・木製立体トラス構造による公共木造建築の調査。

#### ③ゆうステーション（道の駅）

- ・ガラスの壁面を持つ公共木造建築の調査。

#### ④木魂館

- ・木製箱形トラスを用いた木造交流施設の調査。

### 3. 湯布院町（大分県湯布院町）

#### ①湯布院駅舎

- ・木造駅舎の調査。

#### ②湯布院美術館

- ・木造美術館と屋上緑化建築の調査。

#### ③金鱗湖周辺地区

- ・最近つくられた木造による商業施設の町並みの調査。

### 4. 吉野ヶ里歴史公園（佐賀県吉野ヶ里遺跡）

- ・史跡指定された大規模な環壕集落跡の歴史公園。南内郭の復元竪穴式住居と北内郭の主祭殿、斎堂、物見櫓などの古代の木造施設の調査。

### 5. くまもとアートポリス・プロジェクト（熊本県）

#### ①熊本県立農業大学校学生寮（熊本県菊池郡合志町）

- ・新しい木造建築の可能性を迫及した作品。2001年度日本建築学会賞受賞。

#### ②清和文楽館・物産館（熊本県上益城郡清和村）

- ・日本の伝統建築技法を用いた文楽芸術のための諸施設。

#### ③球磨工業高等学校伝統建築コース実習棟（熊本県人吉市）

- ・二重柱とトラス梁による大空間の木造建築。

#### ④水俣ふれあい館（熊本県水俣市）

- ・JR 水俣駅に建つ扇形フレームにより大空間の木造建築。

## 2.3 「木の文化」に関わるシンポジウムの開催

平成14年4月13日に、静岡文化芸術大学にて、「木のプロダクトの可能性を考える」というテーマでシンポジウムを開催した。このシンポジウムは3部構成からなり、第1部の基調講演は、静岡文化芸術大学の木村尚三郎学長による「木の文化論」というテーマで行われた。

第2部の事例発表は、事例1：静岡文化芸術大学の宮川潤次による「九州における木の公共建築」、事例2：天竜川住まいのネットワーク会長である伊藤晴康による「天竜における木の家づくり」、事例3：静岡県建築士会青年委員長である早津和之による「掛川における木の家の普及活動」というテーマで発表が行われた。

第3部のパネルディスカッションは、コーディネーターに静岡文化芸術大学の川口宗敏、パネリストとして静岡文化芸術大学の黒田宏治、創造工房の森田みか、伊藤晴康（前出）、早津和之（前出）の4人により、「木の文化を生かした地域づくりについて」というテーマで行われた。

以上の3部からなるシンポジウム全体を通して、木造建築をはじめ、木製品といった木のプロダクトのこれからの可能性について、様々な視点からの提案がなされた。参加者は、建築関係者、プロダクト・デザイナー、林業関係者、行政、学生など約120名の多くを数え、熱心な討議がなされた。

#### 2.4 「木の家デザインコンクール」の企画・開催

静岡県産木材の消費拡大と木造住宅建設促進を図る一環として、「木の家デザインコンクール」は企画された。応募対象としては、静岡県産木材を使用し、豊かな住空間を創出した専用住宅又は併用住宅で、過去10年以内に竣工した建物である。

このデザインコンクールの企画は、天竜川住まいのネットワークが中心となり、静岡文化芸術大学と静岡県北遠農林事務所が後援する形で進められた。このコンクールへの参加者数は62点と多数の応募があり、優秀な応募作品を確保することができた。

なお、募集要項の作成といった企画段階から、「木の文化」研究会のメンバーが参加した。審査委員長を川口宗敏が努め、さらに静岡文化芸術大学から渡邊章互教授が審査員として参加した。平成14年2月23日には、浜松駅前フォルテにて、表彰式を兼ねた「これからの木の家」というテーマでシンポジウムを開催した。このシンポジウムには、パネラーとして静岡文化芸術大学の川口宗敏と渡邊章互、及び審査委員を努めた塚本こなみが参加した。

### 3. 得られた成果と評価

実施した様々な事業から、以下の3項目が、得られた主要な成果であると考ええる。

- ① 事例調査研究の一環として、地域活性化と結びついた大規模公共木造建築物に関する情報収集ができた。
- ② 木の文化に関するシンポジウムの開催により、木の文化に関連した人的交流が図れ、かつ木の重要性を広く社会にアピールできた。
- ③ 産官学協働による木造住宅デザインコンクールの企画・開催により、木造住宅の良さを社会にアピールできた。

また、この研究の評価に関して言及すれば、「木の文化」研究会主催の「木の文化シンポジウム」は参加者に好評であった。そして、平成13年度に第1回「木の家デザインコンクール」が木の家デザインコンクール実行委員会によって開催されたわけであるが、参加者及び主催者共に好評のため、平成14年度に第2回「木の家デザインコンクール」が行われ、運びとなったことは、関係者に何らかの好影響を与えることが出来たと考える。

なお、今後の課題としては、「木の文化」研究会としては、木の文化関連の情報収集として木造建築物に関するものだけでなく、木のプロダクトに関する情報収集を充実させる必要がある。また、木材利用促進を推進している様々な団体・組織が県内にも存在しており、これらの団体・組織と大学研究者との間の一層の情報及び人的交流を図る必要があると考える。